



| | |
|--------------|---|
| Title | <紹介>出原隆俊著『異説・日本近代文学』 |
| Author(s) | 水野, 亜紀子 |
| Citation | 語文. 2010, 94, p. 57-58 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/69154 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

出原隆俊著『異説・日本近代文学』

水野 亜 紀 子

本書は日本近代文学を幅広く扱った、出原隆俊氏の論文集である。「Ⅰ〈内部〉と〈外部〉」「Ⅱ 作品論再考」「Ⅲ〈典拠〉と〈借用〉」の三部構成で、それら独自の視点を柱として、創見に富む論考十六篇を収めている。

Ⅰでは、数多くの作品を視野に入れて、「〈内部〉と〈外部〉」という観点から日本近代文学全般にかかわる問題を論じる。「〈内部〉と〈外部〉」という問題―日本近代文学の一面―においては「外界（外部）の刺激」という言葉に着目することで、ジャンルと時代を超えたところで北村透谷、二葉亭四迷、夏目漱石の問題意識に共通性があることが指摘されている。また、「北村透谷における〈内部〉と〈外部〉」では「〈内部〉と〈外部〉」というモチーフをめぐる透谷の発想を明らかにする。透谷とエマーソンの関係の深さにも言及する。「透谷と鑑三・透谷と愛山の「側面」では、透谷、内村鑑三、山路愛山の発想の相違を明示して、透谷像を捉える。そこには、透谷が評論文で使用する言葉のほとんどが一回性のものであるという重要な指摘がある。「泉鏡花作品における〈内〉と〈外〉―〈魔〉を中心に―」では、他と様相を異にする、鏡花作品の〈内部〉と〈外部〉を考察する。そして、漱石『行人』と大岡昇平『野火』の共通性を指摘するのは「〈心〉

と〈外部〉―漱石作品の一端―」である。漱石の作品において「自分の手」「自分の力」を超えるものが出現するときに頻出する言葉が、どのようにつながり合って機能するかを検討する。「魔」の内実についても論じられている。『金閣寺』の「私」が置かれる位相を分析する「三島作品における〈内部〉と〈外部〉―『金閣寺』を中心に―」は、作品間に通底する問題意識、モチーフを浮かび上げらせ、三島作品の核心に迫る。

以上の六篇は「〈内部〉と〈外部〉」という視点を導入することで、従来の研究では提出されることがなかった見解を打ち出している。この紹介で全てに触れることができないのは残念であるが、これまで等閑に付されていた問題に対して数々の重要な指摘がなされていることを、加えて述べておきたい。

Ⅱの五篇は、作品の根幹にかかわる問題を提起したうえで、作品全体を改めて読み直した論考である。具体的に見ていくと、「樋口一葉『にぎりえ』の〈彼の人〉」では、作中で「彼の人」と呼ばれる人物の存在について長らく誤読されてきたことを指摘し、テクストの検討を通して『にぎりえ』の真意を把握する。「森鷗外『高瀬舟』異説」では、弟を殺害した喜助の行為が〈安楽死〉を装ったものではないかと疑問を呈し、典拠『翁草』にはないノイズが「高瀬舟」に用意された意味、さらに鷗外の著した他作品との絡みを考察することで「高瀬舟」の仕掛けを解き明かす。「Kの代理としての『私』―漱石『心』における言葉の〈連鎖〉について―」は、テクスト内の言葉の絡み合いの検討を通して、

作品の構造を明らかにするものである。緻密な論証によって、膨大な研究の蓄積がある『心』に新たな見解を打ち出す。「三島由紀夫『金閣寺』の構成意識」では、同一モチーフの意識的な多用とテクストのほころびに着目しながら、手記の書き手の意図がどこまで意識的に貫かれているかという問題を考察し、『金閣寺』の内包する〈物語性〉を掘り上げる。この作品が一見したところ懸け離れて見える太宰治『人間失格』を視野に入れていることも説いている。「洋行と『からゆき』—反『舞姫』小説の位相—」は、岡田虚心亭『妾薄命』(『新著百種』明治二十三年十一月二十八日)に鷗外『舞姫』への批判を読み取ったもので、明治二十三年という時代背景や『舞姫』の受容について考察する中で『妾薄命』の位相が明らかにされる。これらの論考はいずれも、それぞれの作者が採用する小説の方法に鋭く迫っている。

そしてⅢでは、有名な作品の〈典拠〉と〈借用〉を明らかにする。これまで同時代の先行小説を借用する実態は、ほとんど知られることがなかった。この研究は新たな見解を提示する。

「『他界』と『崇高』—『人生相渉論争』開幕前夜の検討—」では、透谷の『他界に対する観念』の成立を追ひ、この評論の位置付けを考察するとともに「『他界』という語を用いる透谷の姿勢について考える。ここでは、透谷の日記に見られる「幽界」から「他界」への用語の移動に、ドイツ文学、美学評論の英訳本が介在することを指摘する。「お力の登場—一葉『にぎりえ』における〈借用〉について—」では『にぎりえ』が先行小説を様々なレ

ベルで、しかもほとんど全面にわたって借用することを明らかにする。それを踏まえて『にぎりえ』を統合する求心力の在り処、余剰の効果を論じる。「水揚げ・出奔・孤児」物語—『たけくらべ』の美登利の変貌—では、『たけくらべ』における美登利の変貌をめぐる決着のつかない議論に対して、決定的な「証拠」を提示するのみならず、一葉が『借用』によって作品を作り上げたことや、後期作品の方向性が『借用』によって定まっていたことを明らかにする。さらに、明治文学史における『水沫集』の意味を論じる。「裏側から読む漱石『心』」では、『心』が鷗外の翻訳作品を摂取する驚嘆すべき事実を述べ、漱石の作品に同時代の他の文学者の作品の影があることを明らかにする。また、『心』の生成にかかわる数々の重要な論点を示す。「芥川龍之介『疑惑』と鷗外・志賀直哉」では、芥川、鷗外、志賀の作品を具体的に検討することで、他作家の作品の取り込みをめぐる複雑な状況を、鮮やかに分析する。

表題には「異説」と付されているが、丹念な読解に支えられた指摘に説得力があるのはいうまでもない。この精緻な研究は、論じる対象の本質を捉えるものといえる。

(大阪大学出版会、二〇一〇年一月、三一六頁、三七八〇円)

(みずの・あきこ 本学大学院博士後期課程修了)